

① 下記にお客様情報をご記入下さい。参加人数欄の口にチェックを入れて、人数をご記入ください。

参加人数	<input type="checkbox"/> 個人計	名	<input type="checkbox"/> 団体計	名
ふりがな				
お名前	※団体の場合は、団体名および代表者名をご記入ください。			
ご住所	〒 ー			
電話番号			F A X	

② 拝観予約日の口にチェックをしてください。

11月							12月						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
						<input type="checkbox"/> 17							<input type="checkbox"/> 1
<input type="checkbox"/> 18	<input type="checkbox"/> 19	<input type="checkbox"/> 20	<input type="checkbox"/> 21	<input type="checkbox"/> 22	<input type="checkbox"/> 23	<input type="checkbox"/> 24	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 5	<input type="checkbox"/> 6	<input type="checkbox"/> 7	<input type="checkbox"/> 8
<input type="checkbox"/> 25	<input type="checkbox"/> 26	<input type="checkbox"/> 27	<input type="checkbox"/> 28	<input type="checkbox"/> 29	<input type="checkbox"/> 30		<input type="checkbox"/> 9						

- 拝観料は、当日受付にて承ります。
 - ◆ 夜間拝観…個人1000円・団体800円(30名以上)
- FAXまたは、郵送にてお申し込みください。
- FAXは24時間受付いたしますが、お問い合わせは、9:00~17:00までをお願いいたします。
- 48時間以内に確認のお電話をさせていただきます。

醍醐寺 略史

総本山醍醐寺二百万坪におよぶ広大な境内地にそびえる国宝五重大塔は静かに一千百三十五年の時の流れを語り伝えています。

京都御所の東南、東山を越えると山科盆地がひろがり、この地は古くから大和・宇治・近江を経て遠く北陸に至る幹線道路があり、平安京の東南近郊の一地区として注目されて来た場所です。醍醐寺は、この盆地の東側、笠取の山頂にかけての広大な地域に位置し、山頂一帯を「上醍醐」山裾を「下醍醐」と称しています。

平安時代の初期、聖宝理源大師は、自刻の准胝・如意輪両観世音菩薩を開眼供養し、醍醐寺開創の第一歩を上醍醐に標し、以来、醍醐天皇、穩子皇后の帰依のもと、上醍醐に薬師堂を建立、薬師三尊を奉安、鎮護国家のために五大堂を建て、五大明王を奉られました。さらに下醍醐に釈迦堂を建立し、山上・山下にわたる壮大な寺院計画がなされました。醍醐天皇の願いは、朱雀天皇・村上天皇に受け継がれ法華三昧堂・五重大塔が建立され一山の尊容が整いました。

平安時代末には、白河上皇・源氏の帰依と共に多くの堂宇が建立され広大な一山の整備がなされ、鎌倉時代になると真言宗事相の根本道場としてその権威を高め、同時に多くの密教芸術を生み出しました。南北朝には足利尊氏の帰依を一身に集めた賢俊座主、足利義満將軍率いる室町幕府において黒衣の宰相と言われ重んじられた満濟准后、桃山時代の義演准后は、秀吉の帰依のもと「醍醐の花見」をもって一山を中興、江戸時代の高演座主は、修験道(山伏)三千名を伴い二度にわたる大峯山入峰をなし、修験道興隆を計る等々、歴代碩徳を迎え寺は護られて来ました。

しかし、近代、明治の廃仏毀釈、昭和の農地解放の悲風は容赦なく山内を吹き荒れ、寺領は返還し寺の護持基盤が大きく揺れるなか、歴代相承の什宝は、あたかも浄水を一滴ももらさず器から器へとつつすがごとく伝承され続けました。

今日、一山は永世護持のため全山「特別史蹟、特別名勝」に指定され、さらに平成六年十二月には「世界文化遺産」に登録されました。まさに世界的な「木の文化」「紙の文化」の宝庫と認識する時、着々と伝承される法流血脈のもと祈り続けられる信仰の尊さを思わずにはいられません。

醍醐寺縁起は語り伝えます。『ある日、聖宝様が深草の貞観寺から東のほうをご覧になると、山上に瑞雲がたなびいているのが見え、その瑞雲に誘われ山に登り山頂に着いた時に「まるで生まれ故郷に帰ったような感じがした」そうです。谷間をご覧になると、一人の老人が湧き出る水を飲んで、「甘露、甘露、ああ醍醐味なかな」と言っていました。聖宝様は老人にこの地に寺院建立をしたいと声をかけられました。老人は、「ここは、諸仏・諸菩薩の雲集する地で、私は地主で横尾明神である。この地を差し上げ、長く守護してあげろ」とおっしゃられ、姿を消されました。』聖宝様はこの地に寺を建てられ、お寺の名前を「醍醐寺」と称しました。「醍醐」は延喜帝の諡号(醍醐天皇・第六十代)にもなり、地名にもなり、湧き出る水を「醍醐水」と呼ぶようになりました。「自分の心の最高の状態、本当に心から満足できる状態」を「醍醐味」と表現し、「日常語」にもなりました。聖宝様がご自身の「靈性」を重んじ感得された「醍醐」の二文字は移りゆく社会の中で生きいきと伝承されています。

【問い合わせ】 〒601-1325 京都府京都市伏見区醍醐東大路町 22 総本山醍醐寺内売店 TEL・FAX 075-571-0112

【個人情報について】 ご記入いただいたお客様の個人情報については、法令および本山の個人情報方針に基づき適切な管理を行い、申込の確認及びそれらに伴うご連絡のために使用いたします。取得した個人情報については法令に基づいた開示請求等正当な理由がある場合を除きお客様の同意なく第三者に提供・開示することはありません。